様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月 １３ 日現在

機関番号：２８００２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１７５１６

研究課題名（和文）要介護高齢者の「強み」を活かした社会貢献への支援方法の提案

研究課題名（英文）Proposal of a Method for Facilitating Social Contributions That Leverage the Strengths of the Elderly Requiring Long-Term Nursing Care

研究代表者
砂川　ゆかり（SUNAGAWA, YUKARI）

沖縄県立看護大学・看護学部・助教

研究者番号：００５８８８２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究目的は、要介護高齢者の強みを活かした社会貢献への支援をアクションリサーチにて実施し、要介護高齢者が社会貢献できる存在になるための支援方法を提案することである。要介護高齢者の強みを活かした社会貢献への支援方法は、個別支援にて、高齢者と支援者の心を行き交わせながら、＜高齢者の歩んだ歴史を一緒に振り返り、誇りや信念を引き出して受け止め、ケア関係をつくる（支援）＞ことを出発点とし、＜高齢者の困りごとの理解者となり、ケアしケアされながら、高齢者のケア力を活性化（する支援）＞しつつ、＜高齢者が陰ながら一生懸命行っている社会貢献に光を当て、関係者間で価値を共有し、生き甲斐感につなげる支援＞であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　研究成果の意義は、要介護高齢者は社会貢献できる存在であるという立場から、社会貢献できるための支援方法を具体的に提示した点である。このことは、要介護高齢者の社会貢献が質的・量的に向上し、超高齢社会の資源の豊かさにつながると言える。また、要介護高齢者自身にとっても社会貢献を行うことを通してサクセスフル・エイジングの達成になると言える。

研究成果の概要（英文）：The aims of this work were to carry out action research to facilitate social contributions that leverage the strengths of the elderly requiring long-term nursing care, and to propose a method of support that would enable these elderly people to be contributing members of society. The method for facilitating social contributions that leverages the strengths of the elderly requiring long-term nursing care is the following. The starting point was joint reflection on the elderly person’s own history, drawing out and accepting their pride and beliefs in order to create a long-term care relationship. Next, having gained an appreciation of the elderly person’s concerns, and while giving and receiving care to activate the elderly person’s caring potential, supporters highlighted the social contributions that the elderly person was earnestly making behind the scenes in order to share their values among the involved parties and to elicit a meaningful sense of purpose in life.

研究分野：老年看護学

キーワード：要介護高齢者　社会貢献　支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

超高齢社会では高齢者の社会貢献が求められている。社会貢献に関する先行研究によると、高齢者は就労や地域活動に関心があり、社会貢献を行うことで、主観的幸福感、生活満足度、抑うつ状態、介護予防に効果があることが報告されている。老年学者の柴田（2005）は、社会貢献をプロダクティビティと同義語とし、サクセスフル・エイジングの下位概念の１つに社会貢献を位置づけている。社会貢献の概念は、単に就労などの有償労働だけを指すのではなく、家事などの無償労働、ボランティア、相互扶助、セルフケアまで拡大してきた。

ノーマライゼーションの理念や完全参加と平等の実現のためには、自立高齢者だけでなく要介護高齢者を含めたすべての高齢者が社会の構成員としてそれぞれの「強み」を活かし社会貢献できることであると考える。要介護高齢者は、ケアの受け手だけでなくケアの担い手として社会貢献できる存在であること、また要介護高齢者だからこそできる社会貢献があることを明らかにすることが必要と考える。そのためには、要介護高齢者は社会貢献できる存在であるという立場から、看護職者の介入により多くの要介護高齢者が豊かな社会貢献ができるような支援方法が導かれなければならない。そのためには、アクションリサーチにより、要介護高齢者の「強み」を活かし社会貢献できる存在になるための支援方法を提案することが必要である。

ところで、要介護高齢者の社会貢献への支援方法はどのようにあるべきなのだろうか。社会貢献のもっとも高いレベルとして位置づけられている就労は、施策的な社会システムとしての取り組みには限界があり、個別的な継続支援の必要性が述べられている。要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造を導いた山口（2019）は、支援者の高齢者の就労についての基盤となる考え方において、支援方法は【高齢者から学び、ケア関係を構築し、楽しみとやりがいにする】が導かれたとし、ケアリングの重要性を述べている。

ケアリングは、保健医療福祉や教育などの対人援助の分野において重要視されている概念である。看護界においては、1980 年代に米国で、科学的思考に価値が置かれ、人間を細分化して理解しようとする“キュアリング”に対抗するかたちで提唱が始まった。ケアリングの普及に貢献した代表的な看護理論家として、ケアリングを文化人類学的視点から理論を展開した Madeleine M Leininger（レイニンガー）、現象学的視点から理論を展開した Jean Watson（ワトソン）や Patricia Benner（ベナー）がいることが報告されている。看護におけるケアリングの研究を始めるためには、看護理論家のケアリング理論を概観することから始める必要がある。

そして、現在ケアリングを看護実践に活用するために、ケアリングを可視化する研究が行われている。西田（2018）は、ケアリングは「患者への能動的な思いや願いを根底にもった＜実践知＞としての看護実践全体である」とし、ケアリングを「行動」や「心のありよう」や「関係性」という一側面のみでケアリングを捉えてきた従来の捉え方に疑問を呈した。ケアリングの看護実践全体を捉える研究方法の工夫が求められていると言える。

看護実践全体を捉えることに挑戦している横田（1990）は、看護という現象は複雑多様な要因を包含するものであるが、よりよい看護実践のために看護現象の構造を明らかにする重要性を述べている。そして、その必要最小限の単位要素として、病む人、看護師、病む人と看護師が交流する関係の過程（以下、「関係の過程」とする）を挙げている。つまり、看護実践全体を捉えるために、病む人、看護師、関係の過程を捉える必要があると言える。

また、“周囲の人と交わり共に生きる”ことに関心を持ち長年研究してきた発達心理学者の鯨岡（2016）は、「人と人が関わる中で、一方が相手に（あるいは双方が相手に）気持ちを向けたときに、双方のあいだに生まれる独特の雰囲気を持った場」を“接面”と呼んでいる。客観科学では扱うことのできない、“接面”にみえる「間主観的な相手の心の動きやその時の自分の心の動きを問題にする」ことも看護実践の向上に不可欠であるとし、その研究方法として関与観察とエピソード記述を提唱している。ケアリングを看護実践全体として可視化するための研究方法として、鯨岡の提唱する“接面”を取り入れる可能性を検討することには意義があると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、要介護高齢者の社会貢献への支援における目に見えないケアリングを可視化するための模索として、ケアリング理論を病む人、看護師、関係の過程の視点から概観し、鯨岡の“接面”との関係性を考察することである。さらに、“接面”を重視した要介護高齢者の強みを活かした社会貢献への支援をアクションリサーチにて実施し、要介護高齢者が社会貢献できる存在になるための支援方法を提案することである。

３．研究の方法

１）第１段階：看護におけるケアリング理論の概観からみた“接面”

ケアリングの代表的な看護理論家として述べられているのは、レイニンガー、ワトソン、ベナーの 3 者である。文献の選定は、日本に取り入れられた理論全体を把握するため、日本語で翻訳されているもの、かつ、理論の集大成が描かれている著書とした。3 者を代表的な理論家として述べている先行研究の引用・参考文献になっている著書を整理し、多用され、かつ発行年が新しいものとした。選定した著書は、レイニンガー看護論-文化ケアの多様性と普遍性（レイニンガー，1992）、ワトソン看護論-ヒューマンケアリングの科学 第 2 版（ワトソン，2012）、ベナー看護論 新訳版-初心者から達人へ（ベナー，2001）であった。

ケアリングの看護実践全体を捉えるために、それぞれの著書から、横田（1990）が述べる看護

実践の必要最小限の単位要素である、「病む人」、「看護師」、「関係の過程」の視点でそれぞれ記述を抽出し整理し、鯨岡の“接面”との関係性を考察した。

２）第２段階：要介護高齢者の「強み」を活かした社会貢献への支援方法の提案

研究参加者は、高齢者サービス提供機関から紹介を受け、同意の得られた要介護高齢者１名である。高齢者サービス提供機関の管理者に研究の主旨を説明し、看護職者の支援により社会貢献できると思われる要介護高齢者のエピソードなどを紹介してもらい、筆者が研究参加候補者の判断をして選定した。

データ収集は、アクションリサーチで社会貢献を意図した支援を行った。支援は要介護高齢者の自宅に筆者が単独で訪問して実施した。1 回の訪問は 60 分～120 分であり、支援の様子はフィールドノートに記載するほか、要介護高齢者の了解を得て、IC レコーダーに録音した。訪問ごとに支援過程における筆者の意図と行為、要介護高齢者の反応を記録した。

データ分析は、支援過程の記録をもとに、“接面”が成り立ったと筆者が捉えた場面を想起し、エピソード記述（①背景、②エピソード、③考察）を作成した。その後、エピソード記述にみえる「要介護高齢者の強みを活かした社会貢献への支援方法は何か」の視点で場面を命名した。

なお、本研究は筆者が所属する大学の倫理審査委員会で承認を得て実施した。

４．研究成果

1）看護におけるケアリング理論の概観からみた“接面”

ケアリング理論と鯨岡が提唱する“接面”において、病む人の捉え方、看護師の捉え方、関係の過程の捉え方には共通性が見いだされた。

①病む人の捉え方

ケアリング理論における病む人の捉え方は、【文化によって育まれた信念・価値観などの認識が、行動や精神の健康状態を決める存在】、【統一された全体、かつ、他者との関わりのなかで深化・経験するスピリチュアルな存在】、【病気を自分なりに解釈して体験する存在】であった。これは、“スピリチュアル”を含めた“信念や価値観”により“解釈して体験する”という主観的内的世界を持つ人であることが重視されており、科学的思考に価値が置かれ、人間を細分化して理解しようとするキュアリングの人の捉え方に対抗するものであった。

鯨岡（2016）の“接面”でも同様に、客観科学への対峙であり、病む人の“心”に焦点があてられている。目に見えない、測定できない、つまりエビデンスにつながりにくい“心”は、客観科学から犬猿されてきた。しかし、人と人が関わり合う対人援助の分野においては踏み込まざるを得ない領域である。鯨岡は、質的研究を標榜する人たちは、この領域に踏み込む覚悟が必要であると述べている。

従って、病む人の捉え方の共通性は、「病む人は、目に見えない主観的内的世界を持っている存在である」と考えられた。

②看護師の捉え方

ケアリング理論における看護師の捉え方は、【ケアリングの精神により文化を超えたケアの知識および思考と行為を導き、全人的ケアを行う存在】、【ケアリングを行う知識・価値観・行動・情熱を持ち、自己全体を活用して関わり、病む人自身が主観的内的世界の意味を見出せるよう手助けする存在】、【病む人の状況を病む人の視点で捉えたうえで、解釈あるいは理解する方法を見つけられるよう関わり、病む人自身の関与を最大限引き出し、自律の自覚と自信を与える存在】であった。

鯨岡（2016）は、人間は誰しも主体として生き、自分の人生に自ら責任を負わなければならないとしている。病む人に関わる支援者は、病む人を主体（当事者）として認め、尊重する必要性を述べている。そして、支援者もまた、支援の場において責任を持ち生きる一人の主体であるとしている。また、人と人が関わればそこに必ず接面が生まれるわけではないとし、「気持ちを持ち出す、気持ちをそこに向ける、気持ちを相手に寄り添わせるというように、一方が相手に、あるいは双方が相手に、気持ちや志向を向けることが接面の成り立ちの条件となっている」と述べている。

従って、看護師の捉え方の共通性は、「看護師は、病む人に気持ちを寄り添わせながら、病む人自身が主体として生きることを支える存在である」と考えられた。

③関係の過程の捉え方

ケアリング理論における関係の過程の捉え方は、【文化ケアの知識を持つ看護師が病む人に接近し、より広い世界観を理解しながら、看護師と病む人が共同参加で目標達成（安寧や健康の維持）に向かう過程】、【看護師のケアリングへの姿勢・態度・意識を出発点とし、病む人の現象野の状況を感じ取りながら入り込む。病む人と看護師がともに参加し、間主観的に関わるプロセスのなかで、病む人と看護師に内的調和やヒーリングの力の蓄えがもたらされる過程】、【相手を思いやる姿勢を持ち、自己解釈的主体としての看護師と病む人が相互に関与しながら病む人の回復力やエンパワメントに向かう過程】であった。

鯨岡（2016）は、前述のとおり、“接面”とは「人と人が関わる中で、一方が相手に（あるいは双方が相手に）気持ちを向けたときに、双方のあいだに生まれる独特の雰囲気を持った場」で

あるとしていた。そして、“接面”に関係する関係発達論を構成する主要概念として、「間主観性」、「関係発達」、「両義性」、「相互主体性」を挙げていた。「間主観性」とは、相手の主観が相手と私の「あいだ」を通って私の主観に現れることであり、その「あいだ」を“接面”と呼んでいる。“接面”は単なる空間の意味ではなく、情動が行き交い、心の動きが行き交う一つの場であるとしている。「関係発達」は、看護師も患者もみな周囲の人との関係の中でその生涯発達過程を進行中の人であり、関係性そのものが時間と共に変容していくというものである。「両義性」は、一方が能動、他方が受動と切り分けられずに、一方が能動であって受動でもあることを示す。例えば、母親が抱く能動、子どもは抱かれる受動と単純に切り分けることはできない。母親は抱く能動でありながら、抱かれる子どもの抱かれ具合に合わせるという受動性を抱え、子どもは抱かれる能動でありながら、母親の抱き具合に身体を沿わせるという能動性を宿している。また、2者関係だけでなく、人間そのものも、自己充足欲求と繋合希求欲求という2つの欲望を抱えて生きる両義性があるとしている。「相互主体性」は、接面の当事者は主体であり、“接面”が成り立つのは必ず2人以上の人間がいる。主体と主体の関係性は、行動上の関係を超えて、欲望と欲望の絡み合う関係、あるいは思いと思いの絡み合う関係としても考えないといけない。それぞれに異なる固有性を抱えた主体同士がそこに関係を築き上げようとして志向を向け合うときに、そこに接面が生まれるとしている。

従って、関係の過程の捉え方の共通性は、「関係の過程は、病む人と看護師はそれぞれ主体として間主観的に関わるなかで、ケアしケアされながら、生涯発達する過程である」と考えられた。

④ケアリングを可視化するために“接面”を用いる意義

鯨岡（2016）は、“接面”を可視化する研究方法論として、関与観察とエピソード記述を提唱している。関与観察については、客観主義（行動科学）パラダイムと接面（関与観察）パラダイムの違いで説明している。客観主義（行動科学）パラダイムでは、観察者（研究者）は黒衣で、研究者は研究対象の外側にいて何も感じないということが前提となる。つまり、“接面”を消去ないし無視することによって成り立つ枠組みであるとしている。一方、接面（関与観察）パラダイムでは、研究者（実践者）も“接面”の当事者として、その“接面”で起こっていることを自らの身体を通して感じ取ることを重視する枠組みであるとしている。

また、エピソード記述については、「相手の心の動きは接面を通して初めて看護師は感じ取られ、接面で生じている看護師の心の動きは必ず相手に跳ね返っている。接面で生じていることは当事者である看護師にしか把握できない、接面から感じ取ったことはエピソードに描かないかぎり第三者に伝えられない」としている。エピソード記述とは、①背景（主人公の家庭環境や自分との関係など）、②エピソード、③考察＝メタ観察で構成される。メタ観察とは、なぜ自分はこの出来事に感動したのか、なぜ自分はここで心を動かされたのか、出来事を自分の固有性と結びつけて、その出来事を自分なりに了解すること、自分が得た体験の意味を明らかにすることであるとしている。また、エピソードに対する読み手の了解可能性が、接面パラダイムにとっての認識論の要であるとしている。

ケアリングを可視化するために“接面”を用いる意義は、ケアリング理論と“接面”において、病む人の捉え方、看護師の捉え方、関係の過程の捉え方には共通性が見いだされ、ケアリングの看護実践全体は“接面”のなかに捉えられると考えられた。そして、“接面”は、関与観察とエピソード記述により、病む人と看護師の心の動きに接近可能であることから、ケアリングの可視化の可能性が広がると考えられた。

2）要介護高齢者の「強み」を活かした社会貢献への支援方法の提案

①研究参加者の浮かび上がり

管理者から、80歳代、要介護度1の男性で、要介護度5の妻と二人暮らしのA氏の提案があった。提案理由は、A氏は過去には民泊ボランティアや老人クラブの会長など地域のために活動してきた方であった。脳梗塞をくり返し、老人クラブの会長の役割がままならない状況でも、役割を降りたがらない様子があったため、他者のために役割を果たしたいという思いはあると思うが、現在何をしているかはよく分からない。また、医師がA氏に直接ケアが必要とのことで介護保険のサービスを勧めてきたが拒否しており介入が難しく、髭を伸ばし、入浴や更衣もせず自宅に引きこもり、昼夜ともに寝ていることが多い。ケアスタッフはもちろん、娘が来て入浴させようとしても拒否しており、介入の糸口が見つけにくいと語った。

筆者は、A氏は民泊ボランティアや老人クラブの会長を務めてきた経験があり、これまで地域の人のために役割を果たしてきた人であると捉えた。現在もA氏には他者の世話をしたいという思いが残っているかもしれない、もしくは思いはあっても行動に移せない身体機能の低下などの理由があるかもしれないと考え、A氏に会ってみようと思った。

②“接面”に捉えられた要介護高齢者の強みを活かした社会貢献への支援方法

社会貢献を意図した支援過程で“接面”が成り立った場面から、＜高齢者の歩んだ歴史を一緒に振り返り、誇りや信念を引き出して受け止め、ケア関係をつくる支援＞、＜高齢者の困りごとの理解者となり、ケアしケアされながら、高齢者のケア力を活性化する支援＞、＜高齢者が陰ながら一生懸命行っている社会貢献に光を当て、関係者間で価値を共有し、生き甲斐感につなげる支援＞の3つの支援方法が導かれた。

支援方法の例：＜高齢者の困りごとの理解者となり、ケアしケアされながら、高齢者のケア力を活性化する支援＞

【背景】

前日の初回訪問時のA氏は、億劫そうに私を迎え入れ、管理者からの紹介をむげに断れず、訪問を引き受けざるを得ない様子であった。しかし、A氏はこれまで無我夢中で仕事と子育てを頑張ってきた自負や、妻の介護をしながら家を守っている努力を語るなかで表情が明るくなっていった。翌日も訪問してよいか訪ねると、「何時でもいいですよ、いらっしゃい」と答えた。そこで、A氏は普段、9時～10時に遅めの朝食をとると話していたため、朝食を食べて一息ついたころの11時に訪問しようと考えた。

【エピソード】

訪問時、A氏は横たわり、「どうぞ入って下さい」と迎え入れるが起き上がる動作や表情から疲労感が見えた。前日の私の訪問で疲れさせてしまったかもしれないと感じた。A氏の疲労感を軽減できることを探したいと思った。マッサージ器が目につき話題にすると、肩こりや肩関節周囲炎が辛いことがわかった。A氏の切実な辛さを受け止め改善したいと思い、マッサージを提案した。A氏はすぐに返答せず驚いた様子であった。“依頼心というものを持たないで、全部自分でやってきた”という前日のA氏の言葉の通り、他者からの世話を受けるのは苦手な人なのだと感じた。しかし、提案をすぐに拒否しない様子に、マッサージを受けたい気持ちはあると察した。「私、マッサージは得意ですよ」と言うと、「お願いします」と返答した。マッサージをしながら、「腕が上がらないと着替えるのも大変ですよね」と痛みによる生活のしづらさを予測し尋ねると、一瞬（動作を想起していたのか）間が空いたあと、ぱっと嬉しそうな表情に変わり、「はいはい、ははは、おっしゃるとおり！特に高いところの物をとるのは大変！」と話した。

それからは、A氏はテレビや本で知識を得て実践している健康法をあれやこれやと私に教えてくれた。痛みに負けず、自力で試行錯誤しながら問題解決しようとする姿勢に私は感銘を受け、大きく相鎚を打ちながら聞いた。A氏は「自分で頑張らなければならんから。家族（子ども）が近くにいて加勢してくれるわけじゃないから。自分でやらんといかんでしょ」、「自分が家を守っているから子どもたちも安心して過ごせる」と語った。私は退室する際、また伺わせていただく約束をし、「これからも家を守っていてくださいね」と伝えた。A氏は、「家を守っていますね。毎日でもいらっしゃいよ。次の滞在中は家の空いている部屋を使うといいですよ」と、島外から来ている私に宿泊先としてA氏宅の利用を誘ってくれた。翌日には、髭を剃り、入浴を自らした様子できれいになり、晩には、友人との宴会を企画し、私も誘われた。その後、管理者からの情報では、A氏はサービスを拒否することなく、私がA氏のノートに残した氏名を訪問診療医に見せながら、「話しを聞かせて頑張りました」と報告していたとのことだった。

【考察】

A氏との関わりのなかで、A氏がいかに肩の痛みを改善するために一人で試行錯誤してきたかが身に染みて伝わり、私の肩も重く感じた。A氏が入浴や更衣をしないことをケアスタッフは課題として捉えていたが、痛みによる生活上の不自由さがあるなかでの整容や更衣はA氏にとって特に億劫に感じるのだろうと思った。肩関節周囲炎はすぐによくなるものではなく、痛みと付き合っていくものであり、一回のマッサージによる効果はあまり期待できない。しかし、A氏の痛みに寄り添い、その不自由さを共感しつつ、苦労をねぎらいたいと思った。A氏が翌日に自ら髭を剃り、入浴をしていたことは、自分の困りごとの理解者（応援者）ができたことで、痛みがあってももう少し踏ん張ってみようと思えたのではないかと感じた。A氏が本来もっているケア力（自分の健康を向上させる力、人をもてなしたり、喜ばせたりする力）が活性化され、髭を剃り入浴する、サービスを受け入れるという自分へのケア、宴会を企画する、自宅を宿泊先として提供するという他者へのケアという社会貢献につながったと考える。

要介護高齢者の「強み」を活かした社会貢献への支援方法は、個別支援において“接面”を重視し、相手と自分の心を行き交わせながら、＜高齢者の歩んだ歴史を一緒に振り返り、誇りや信念を引き出して受け止め、ケア関係をつくる（支援）＞ことを出発点とし、＜高齢者の困りごとの理解者となり、ケアしケアされながら、高齢者のケア力を活性化（する支援）＞しつつ、＜高齢者が陰ながら一生懸命行っている社会貢献に光を当て、関係者間で価値を共有し、生き甲斐感につなげる支援＞であると考えられた。

＜引用文献＞

鯨岡峻(2016)：関係の中で人は生きる―「接面」の人間学に向けて―，ミネルヴァ書房．
西田絵美(2018)：看護における〈ケアリング〉の基本原理への視座：〈ケアリング〉とは何か，日本看護倫理学会誌，10(1)，8-15．
柴田博(2005)：サクセスフル・エイジングの条件，桜美林シナジー，4，1-14．
山口初代（2019）：要援護高齢者の介護予防活動を就労につなげる支援の構造，沖縄県立看護大学大学院学位論文．
横田碧(1990)：症例研究と看護学－症例報告と症例研究の異同－，日本看護研究学会誌，13(1)，53-56．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 砂川ゆかり　大湾明美　田場由紀
２．発表標題 要介護高齢者の社会貢献を促進する支援の様相－「接面」のエピソード記述の試みから－
３．学会等名 日本老年看護学会第25回学術集会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考